
蒼の残影

灯里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼の残影

【Nコード】

N2511X

【作者名】

灯里

【あらすじ】

何も知らなかった。誰も教えてくれなかった。人は一人では生きていけないこと。知らなかったでは済まされない。無知は罪なのだから。

魔都クロスベルで巻き起こる事件の数々。それは軌跡ではなく、蒼の残影。

零の軌跡の原作沿い二次創作小説。最初からかなりネタバレしてまゝ。碧の軌跡にも続きます。空の軌跡のネタバレも含みますのでご

注意を。

オリジナルキャラが登場します。傾向としてはシリアスで友情重視、恋愛要素薄め、ランディ寄り。

人物紹介（前書き）

主人公は盛大に空の軌跡のネタバレを含んでいます。閲覧には注意してください。

人物紹介

『何故？ だってわたしはそれしか知らなかったから』

ルイン・アスール

本作品の主人公。十八歳。武器は刀。クロスベル警察の新米捜査官。ロイドとは同級生。

何事に対しても冷静で冷めていると思われがちだが、結局は他人を助けてしまう。

今は亡き義父は遊撃士^{フレイサー}で、警察学校に入学するまでは義母と共にクロスベル市内で暮らしていた。警察官になったのは、遊撃士^{フレイサー}では守れないものがあるから。

とある事情から本気で戦うことが出来ない。戦うことは本人曰く『リハビリ』らしい。

エニグマカバーは「エンドレスブルー（endless blue）」。ストラップは白い羽飾りと青い薔薇の造花。

以下、空の軌跡のネタバレを含みます。

《結社》の元執行者候補。候補時代は青薔薇と呼ばれていた。とある仕事に失敗して用済みとなり、瀕死の重傷で捨てられていた所を義父に救われる。その時に使っていた武器は剣だが、義父に刀の扱いを教えられた。現在持っている刀は義父の形見の品。

過去のトラウマから無意識にリミッターをかけてしまったため、全力で戦うことが出来ない。

prologue

松明の光に照らされて、長い階段を下って行く。自分の体だといふのにまるで自由にならない。誰かが勝手に動かしているようだ。戸惑うルインをよそに、自分は前を走る者たちと共に立ち止まった。振り向いた人物を見て息を呑む。鳶色の髪と同色の瞳。白いジャケットを纏った少年はルインの良く知る彼だった。

ロイド・バニングス。ついこの間まで警察学校で共に学んだ学友だった。

だが他の男女には見覚えがない。

長い灰色の髪の少女は恐らく、ルインやロイドと同年代だろう。整った聡明そうな顔立ちをしている。纏う雰囲気からして良家の息女といった感じが。

水色の髪を頭上で二つに纏めた少女はせいぜい十代半ば。緑掛かった黄色の瞳に落ち着き払った彼女は冷静に辺りを見回していた。

そしてもう一人。肩近くまで伸びた赤毛を無造作に後ろで纏めた青年。オレンジのジャケットを羽織った彼には見覚えがある。あるが思い出せない。

それよりもこの遺跡のような場所はどこだろう。長い間放置されていたのか、石畳は所々ひび割れ、苔が生えていた。するとロイドが水色の髪の少女の方を向く。

「どうだ……テイオ？」

「……悪い予感の中です。時・空・幻……。上位三属性が働いています。《塔》や《僧院》と同じですね」

どうやら彼女はテイオ、という名らしい。しかし一体どういうことか。時、空、幻の三属性は上位属性と呼ばれ、本来なら働くはずもないものだ。

彼女の口から出た《塔》、《僧院》がどこを指しているのかも分からない。テイオの話を聞いた灰色の髪の少女が息を吐く。

「そう、やっぱり……。どうやらこの先は一筋縄では行かないみたいね」

「って事は、あの得体の知れない化物どもが徘徊してるってことか。やれやれゾツとしない話だぜ」

「そう？ 悪魔だろうと何だろうとわたしたちを阻めはしない」

やれやれ、と大げさに肩を竦める青年にルインは微笑する。悪魔だろうと何だろうと、自分たちを阻むことは出来ない、と。

やはり体は自由にならず、見ていることしか出来ない。

「そうか……。分かった。当然、敵による待ち伏せもあるはずだ……。みんな、気を引き締めて行こう！」

皆、ロイドの言葉に力強く頷き、再び歩き出した。

長い階段を降りると、開けた場所に出る。道は三つに分かれているが、その内二つは階段が崩れ落ち、あるいは瓦礫が邪魔で通れない。松明に導かれるように残った道を進んでいく。皆が警戒しているのは空気で分かった。

次に出た場所は長い通路。敷かれた真紅の絨毯は色あせ、くたびれている。天井にはかつてシャンデリアだったものが吊り下がっており、石柱の間から光が漏れていた。

やがて歩き続けていた一行の足が止まる。広がっていた光景にルインたちは思わず息を飲んだ。

「ここは……!?!」

目の前に広がっていたもの。それは地の底まで届かんばかりの奈落。赤黒い闇が渦巻いており、とても直視出来ない。嫌悪感が込み上げてくる。悪趣味もいいところだ。そう、あの《白面》のようだ。ルインだけではない。皆の表情も嫌悪に歪んでいた。

「地の底に続く縦穴……。なんて大きさなのかしら」

「ここからの目測だと深さ五百アージュって所か。やれやれ……。こいつは骨が折れそうだぜ」

灰色の髪の少女が呆然と呟くと、青年はため息をついて奈落を見つめる。底は見えず、瘴気が渦巻いたまま。正に地の底まで続かんばかりの穴はかなり深い。覗き込んでもとても下までは見通せなかった。

青年の言う通り、ルインの予想も五百アージュ（メートル）である。下るにしてもかなり時間が掛かるだろう。

とその時、同じように穴を見ていたロイドが気づく。先程から沈黙しているティオの顔色が悪いことに。

「ティオ、どうした？」

「大丈夫？ 真っ青な顔してるわ」

灰色の髪の少女もティオを気遣うような視線を向ける。彼女の顔色は悪く、蒼白と言っている。今にも崩れ落ちそうなほどである。

少女の足は小刻みに震え、握りしめた手も震えていた。

だがティオは嫌な考えを振り払うように首を振ると、平静を装って答える。

「……問題ないです。ただ、昔いた場所のことを少し思い出してしまつて……」

「昔いた場所……そうか」

「共和国の西端にあつたつていう連中の拠点のことだな？」

合点が行つたようなロイドと青年だが、ルインには全くもつて分からなかつた。共和国の西端にあつた連中の拠点や『ティオ』が昔いた場所についても。

これは夢なのか、それとも別の何かなのか。少なくとも『ルイン』には未来を視る力はない。頷いたティオは、ゆっくりと自らの推論を述べる。

「……………はい。たぶん、この縦穴は《煉獄》に続く黄泉路を見立てて建造されたんだと思います。女神を否定する概念としての悪魔に近づき、利用するため……そして彼らに供物を捧げる《儀式》を執り行うために」

彼女の話ではこの奈落は《煉獄》に続く黄泉路。それを模したものの。女神を否定する概念としての悪魔。そして供物、儀式。《煉獄》や《悪魔》は聖典に登場するそれを指しているのだろうか。

何も知らない、分からないはずなのに胸が騒ぐ。そう、知っている気がした。何を？ 分からない。考えれば考えるほど分からなくなり、深みにはまっていってしまう。

唯一分かるのは、自分が彼ら^{ルイン}に対して信頼を寄せていること。

「……最低の連中ね」

「ハッ、道理で辛気臭い匂いがするわけだ」

「趣味が悪いのね。まるであの人みたい」

目を伏せ、吐き捨てるように言う少女に、皮肉めいた笑みを浮かべる青年とルイン。趣味の悪さはルインが知るある人物を思い起こさせる。《教授》、あるいは《白面》と呼ばれていた。

今のルインの声から感じられるのは嫌悪だけで憎しみではない。まるで全てを吹っ切ったようなどこか余裕のある声。

ロイドは皆を見回し、そして……。

「……だっただら俺たちの仕事は一つだけだ。俺たちの道を拓いてくれた人たちのためにも。そして俺たちの帰りを待っているあの子のためにも……その辛気臭い幻想を叩き壊して陽の光の下に引き摺り出してやる！ もう誰も、辛くて哀しい思いをしなくて済むように……！」

ロイドが発した声は決して大きなものではない。

しかし心の中にすんと落ちてくる。帰りを待つあの子、とは誰のことなのか。

もう誰も、辛くて哀しい思いをしなくて済むように。その言葉に『全て』が込められているような気がした。

それでも今のルインにはその『全て』が分からない。どんなに記憶を探っても出てこないのだ。だと言うのにこの焦燥は何なのか。忘れてはならないと本能が警鐘を鳴らす。

「……ロイドさん……」

「まったく熱血野郎と言いたいところだが……ま、今回はかりはそいつに一枚乗らせてもらっせ！」

「ふふ、私も乗った。敵は、全てを影から操っていた得体の知れない蜘蛛のような存在……。でも今の私たちならきつと届くことが出来るはずよ」

テイオが嬉しそうにロイドの名を呼ぶと青年は頭を掻きながら苦笑し、満面の笑顔を浮かべる。少女も笑みを漏らし、仲間たちに視線を向けた。

今の自分たちならきつと届くことが出来るはず、と。

「……はい。絶対に……負けません！」

「どんな相手だろうと、叩き潰せばいいだけ。辛くて哀しいのはもう嫌だから……！」

ルインの手は愛用の刀に添えられた。義父の形見の品。相変わらず傍観者で、自分の意思では動かせないが、手に馴染んだ刀の感触は同じ。

義父が隣にいてくれると思えば、何も怖くない。怖くないはずなのに、得体の知れない不安に襲われる。これは紛れも無い恐怖だ。

「よし……それじゃあ行こう。クロスベル警察・特務支援課所属、ロイド・バニングス以下五名　これより事件解決のため強制潜入を開始する……！」

ロイドの声を最後に薄れゆく意識。視界は黒に染まり、もう何も見ることが出来ない。なのに、突如として聞こえた幼い少女の声。

姿も見えない少女は何かを言っている。

何故かその声を聞き逃してはならない気がした。すると、闇の中に現れた幻影。まだ十歳にも満たない少女である。鮮やかな緑の髪を持つ彼女は目を閉じ、悲痛な声でこう言った。

叶わぬならば、全てを。

prologue (後書き)

最初って書くと意外に長いですね……！そして不完全燃焼です……。
もっと上手く書きたいんですがこれが限界でした。

緋色の青年

誰かの声が聞こえた気がした。浮上する意識。ゆっくりと瞼を開けば、太陽の光が眩しい。

真っ先に目に飛び込んで来たのは開きかけの本と机。どうやら本を読んでいる内に眠っていたようだ。何か大事な夢を見た気がする。それなのに何も思い出せなかった。どんなに思い出そうとしても、だ。

本を閉じ、夢の内容を思い出そうとしていると、一階から聞き慣れた声が響く。

「……ルイン、そろそろ時間でしょう？」

「大丈夫、もう行くわ。母さん」

声の主は義母で、中々降りてこない娘を心配して声を掛けたようだ。ルインは今日からクロスベル警察で働くことになっていた。

乱れた髪を手ぐしで整えて立ち上がる。時間に余裕はあるが、初日から遅刻では洒落にならない。部屋を出ようとして、鏡の前で立ち止まる。

鏡に映っているのは若い少女だ。長く艶やかな髪は天空を思わせる蒼　ヘブンリーブルー。長い睫毛に縁取られた淡い紫色の瞳が鏡の中からルインを見返していた。

ここ何年かの間に見慣れた自分の顔。昔は鏡を見ることもなかったため、鏡を見る、という行為にもまだ慣れない。

鏡の中の『ルイン』は冷たい表情をした美しい少女だった。それを見て思う。

『……まるで人形みたい』

目を伏せて腰に差した刀に触れる。黒塗りの鞘に納まったそれは今は亡き養父の形見。遊撃士^{ブレイサー}であった父の物だ。

瀕死の重傷であった自分を助けてくれ、あまつさえ実の娘のように育ててくれた両親には感謝している。彼らがいなければルインは『人間』にはなれなかったし、間違いなくあの時に死んでいただろう。

「ルイン？　どうかした？」

「何でもないの」

母の声に思考を中断し、部屋を出て階段を降りる。母を見たルインの顔が自然と綻んだ。養母エレインは四十歳を前にしても色褪せない美しさを持つ女性である。若い頃は養父グレンと同じ遊撃士^{ブレイサー}だったらしい。

見た目はたおやかで、とても荒事に向いているとは思えないが、彼女が見た目通りでないことは娘であるルインが一番よく知っていた。

「嫌な夢でも見たの？　少し顔色が悪いわ」

「平気。それにどんな夢だったか覚えてないから」

エレインは優しい手つきでルインの頬に手を添える。今、自分はちゃんと笑えているだろうか。

昔は酷くうなされたことがあった。ルインが『何』であったか、エレインは知らない。一度として聞かれたこともなかった。生死の境をさまようほどの大怪我を負っていた身元も分からぬ自分を介抱

してくれた両親。

ルインが以前、身をおいていた世界はエレインからすれば考えられないものなのだろう。両親はルインに人の温もりを教えてくれた、人間にしてくれた。

だから分かってしまった。人の痛みを、悲しみを。知らなかったでは済まされない。無知は罪なのだ。

だからこの業は自分が背負うべきものであつて母には関係ない。

「行つてきます、母さん。……父さん」

すつと足を引き、エレインから離れる。玄関の扉に手を掛けると、母と、写真の中で微笑む父に挨拶をして家を出た。

すぐに前を向いて歩き出したルインは知らない。エレインが悲痛な表情で自分を見送ったことに。

「……駄目ね、わたし。あの子の母親失格よ、あなた」

家を出たルインはその足でクロスベル警察に向かう。交易都市クロスベル。ここ数年で目覚ましい発展を遂げたクロスベルは、昔とは比べものにならないくらい華やかになっていた。

ルインは歩きながら白い封筒を取り出す。中に入っていたのは一枚の紙である。所謂辞令だ。

白い紙にはこう書かれていた。

ルイン・アスール殿

特務支援課への配属を命ずる。指定日時に警察本部へ出頭せよ。

クロスベル警察・人事課

書かれた字を目で追って、再び仕舞う。

「特務支援課、ね……」

クロスベル警察に特務支援課は“存在しない”。気になって調べたのだが、どうやらセルゲイという警部によって新設される部署だという。

クロスベルは幾つもの区画で別れている。ルインの家があるのは東通りで、警察は湾岸区の隣、行政区にあった。クロスベルに住んでいても、ルインが警察を訪ねたのはほんの数回。

ルインは警察本部を一瞥し、足を踏み入れる。灰色と青で統一された警察内は落ち着きのある佇まいをしており、清潔感に溢れていた。

受付からは待ち合いが見渡せるようになっており、万が一おかし

な動きをする者がいれば直ぐに分かるようになっていた。

しかし受付に居るのは女性一人だけ。まだ少女と言っても差し支えないだろう。薄紅色の髪を二つに結わえた活発そうな彼女だけで、他は見当たらない。仕方なく近づいて声を掛ける。

「わたしはルイン・アスール。本日付けで特務支援課に配属になりました。セルゲイ警部はいらっしゃいますか？」

ルインが話しかけても少女は無言だった。瞬きもせずじっとルインを見つめている。何かおかしな所でもあったのだろうか。

そんな少女を訝しげに見返していると、我に返ったのか彼女は慌てて駆けて行った。

「あ、は、はい……！ セルゲイ警部ですね。少々お待ちください！」

一人残される形になったルインは、彼女が戻るまで待つしかなかった。壁に掛けられてある時計を見上げる。定刻より早いが早すぎるということはない。

ドアが開く音に玄関の方を一瞥すると、オレンジのジャケットを羽織った青年がこちらに歩いて来た。

年の頃は恐らくは二十代を僅かに過ぎたところか。端正な顔立ちをしているが、見るからに遊び人といった雰囲気纏っている。

切れ長の瞳は若葉よりも濃い深緑。肩より少し長い髪は燃え盛る炎を思わせる鮮烈な赤で、後ろで適当に結んで背中に流していた。

青年は受付に誰もいないことに気づいたのか、緑色の目を細めている。

「何だ。誰もいないのか？」

一瞬、重なつた。青年の面差しが、血と埃に塗れたあの場所で見
た誰かに。

だが果たしてそれが誰であつたか。何より気になるのは彼が纏う
雰囲気。明らかに戦い慣れたものの『それ』だ。場数を踏んだ、
いや、そんな生半可なものではない。修羅場を潜ってきた、と言え
ばいいだろうか。

殺伐とした世界に身を置く者はどんなに巧妙に隠しても、隠し切
れない匂いがある。ルインも同じだ。だからこそ分かつた。

青年も見られていることに気づいたのか、彼の視線がルインに向
く。青年の方が頭一つほど背が高いため、ルインが見上げる形にな
つた。ルインを見た彼が口を開きかける。

だがそれはやって来た男の声に遮られた。

「お、来たな新人ども」

緋色の青年（後書き）

ランディしか出せませんでした……！次こそはロイドたちを！

特務支援課課長

「お、お待ちせしました……！ こちらはセルゲイ警部です」

男の後ろからひょっこりと薄紅色の髪の少女が姿を見せる。ルインの前にいるのは無精髭を生やした壮年の男だ。撫で付けられた黒髪に同色の瞳。赤いネクタイに、シャツの袖を半ばまで捲り上げていた。

ただ、漂う倦怠感とやる気のなさはどうにかならないものか。彼はルインと青年を一瞥すると、やる気なさそうに名乗った。

「特務支援課課長、セルゲイ・ロウだ。お互い、自己紹介は後でな付けて来い。他の連中が来るまでそこに突っ立つてる訳にはいかなら」

特務支援課課長、セルゲイ・ロウ。手短に自己紹介を済ませた彼は言いたいことだけ言うと、さっさと行ってしまふ。残されたルインも青年を放って歩き出す。セルゲイがお互い、と言ったことから、どうやら彼も新設される特務支援課のメンバーなのだろう。

正直な所、関わりたくないのだがこれからそうも行くまい。向こうが気づいていないのなら、それはそれでボロを出さなければいいだけだ。

その時、躊躇いがちに投げ掛けられた声。声の主はセルゲイを呼んで来てくれた少女だ。

「あ、あの、ルインさん。頑張ってくださいね」

「ありがとう」

立ち止まり、振り返って微笑めば少女は頬を赤く染めて、ルインから視線を逸した。自分の容姿が中々であることをルインは理解している。こうして微笑めば大抵の者は騙されることも。笑いたくなくても笑えるのは、出来れば思い出したくない、だが忘れてはならない過去が影響していた。演じるのは得意だ。

歩き出したルインの隣に、追いついてきた青年が並ぶ。何を思ったのか、へらりと笑って親しげに話しかけようとする青年だが、

「ま、お互い、自己紹介は後ですとじてだな。お、おい……ちょっと待ってって」

ルインはその言葉には答えず、歩く速度を上げる。こちらとしてはお近づきになりたくはない。軽く無視をしてセルゲイについて行く。彼が誰であるか確信がある訳ではない。

だが只者ではないことは確かだ。流石に執行者たちには及ばないだろうが、彼が纏う気配オーラは普通とは違う。そして何気ない動作が草が滑らかだ。おまけに底の厚い靴を履いていても足音は一切しない。

もつとも、彼がルインを警戒している様子はなかったが。

彼は素っ気ないルインの態度にもめげずに色々と話しかけてくる。適当に答え、あるいはかわして歩を進める。ここまで来ればフラックを通り越して馴れ馴れしい。不快ではないが、一々相手をするのが面倒だ。

セルゲイに案内された場所は、会議室のような広い部屋だった。長い机に椅子。ホワイトボードには何枚かの紙が貼り付けられている。

だがセルゲイは二人を案内すると、適当に座れと言って部屋を出て行ってしまふ。仕方なく椅子に座って待っていると、暫くして入

つて来たのは二人の少女だ。一人はルインと同じ年頃だろう。

長い灰色の髪に後ろで結ばれた黒のリボン。整った顔立ちをしているが、警官にはとても見えない。どちらかと言うと良家の息女と言った佇まいか。磨き上げられたペリドットを思わせる緑の瞳は窺うようにこちらを見ている。

そんな彼女の後ろにいる少女は、まだ十代の半ばに違いない。頭の上で二つに纏められた水色の髪に、長い睫毛に縁取られた瞳は美しい金色。

少女は灰色の髪の彼女を追い越すと、無言で椅子に腰掛ける。愛らしい顔立ちをしているが、纏う黒衣と浮かべる表情のお陰で、その年頃の少女が持つ雰囲気は微塵も感じられなかった。

若すぎる同僚たち

「こんにちは」

灰色の髪 of 少女は黒衣の少女の隣に腰掛け、にこりと微笑む。赤毛の青年が挨拶を返すと、ルインも彼に倣った。ここで印象を悪くしても一緒に働きづらいだけだし、わざわざ挨拶を返さない理由はない。

それにしてもセルゲイが戻る気配はまだなかった。それは自分たち以外にもメンバーがいるから、と考えるのが自然である。

青年や少女たちは何をしているのかと一瞥すると、隣に座る青年と目が合った。何故かにこり、と笑われるが、愛想笑いをして視線を逸らす。

水色の髪 of 少女は自分以外のメンバーに関心がないのか、考え事をしてしているらしい。灰色の髪 of 少女はと言うと、ルインを見てふわりと笑いかけた。

「ねえ、あなた。私と同じ年くらいかしら？」

「……自己紹介は後だと、セルゲイ警部が言っていたはずですが？」

少女の言葉にルインが答えようとした直後、冷ややかな声が被せられた。

声の主は勿論、あの黒衣の少女である。正確には名乗ってすらいないため、自己紹介、ではないだろう。

しかしそんな彼女に気圧されたのか、少女の笑みが僅かにひきつっていた。

「そ、そうだったわね。ごめんなさい」

「ま、まあ、そんな細かいことはおいといてだな……」

慌てて青年が間に入ろうとした時だ。近づいてくる足音と気配にルインと彼らの視線が一齐に扉に向く。

暫くしてセルゲイに連れられ、一人の少年が入室した。歳は十代後半。落ち着いた雰囲気を漂わせる少年だ。鳶色の髪に同色の瞳。顔立ちは整ってはいるものの、派手さはなく周囲に埋没してしまっている。そうだ。

黄色のタートルネックの上に、白のジャケットを羽織っている。首から下げたドッグタグが照明を反射して、ちかり、と煌めいた。

「あら……」

「おっと。おいでなすったようだな」

少年を見て灰色の髪の少女と青年が同時に声を上げた。そしてルインも僅かばかり驚いていたのだ。それは少年も同じようで、ルインを見た彼は驚きに目を見開いている。

セルゲイに促された少年はルインたちの前に立った。

彼　ロイドはルインと同じ警察学校で学んだ学友である。それほど親しい仲ではないが、付き合いが悪かったということもない。真面目で品行方正。優秀な成績で卒業した彼も、確か捜査官の資格を取ったと風の噂で聞いた。

ルインも同時期に受験して資格を取ったのだが、それきりで会っていないかったのだ。久しぶり、とまではいれないが、ついこの間会ったとは少し違う。

「待たせたな。こいつが最後のメンバーだ。おい、自己紹介」

「あ、はい」

セルゲイによるとロイドが最後のメンバーだという。ならば特務支援課はこの五人だけ。促されたロイドは何やら考え事をしているのか、一向に口を開かない。

だが彼が戸惑うのも無理はないだろう。

ルインを含めてこの場にいる者たちは皆若い。所謂新人と言っても過言ではないだろう。実際、ロイドとルインは捜査官の資格を持っているとは言え『新人』で、黒衣の少女は言うまでもない。

赤毛の青年は五人の中では一番の年長者だろうが、これまでの態度と感じた気配を考えると、ルインも心中穏やかではいらなかった。

「おい、どうした？ 名前と出身だけでいい」

「す、すみません。 ロイド・バニングス。ここクロスベル市の出身です。しばらくの間、外国で暮らしていたんですけど……この度、警察に入るにあたり戻ってくることになりました。これから直しくお願ひします」

セルゲイは怪訝そうな顔でロイドを見つめている。その声で我に返ったロイドは慌てて謝り、丁寧に自己紹介をした。

若すぎる同僚たち（後書き）

ここまで書くのに時間かかりすぎました。

赤い星

「おーおー、真面目だねえ。俺はランディ。ランディ・オルランドだ。趣味はナンパ、ギャンブル、グラビア雑誌の鑑賞って所だ。あとでお前さんには俺の秘蔵コレクションから取っておきを貸してやるよ」

「ええっ……!？」

ロイドの自己紹介を聞いて赤毛の青年が笑う。そして彼も名乗った。ランディ・オルランド、と。

ルインにはその後の言葉などまるで耳に入っていなかった。戸惑うようなロイドの声も。初めて見た時、見覚えがあつたのは当たり前だ。

ルインと彼は一度会っている。勿論、街ではない。血と埃に塗れた戦場で。もっとも、彼は覚えていないだろうが。いや、覚えていたとしても分かるまい。

「赤い星座……」

「え?」

ルインの呟きにランディが振り向く。しかし何を言ったのかまでは聞こえなかったらしい。ルインは以前、身喰らう蛇ウロボロスという組織で執行者候補とされた存在だった。その時に聞いたことがある。

獵兵团《西風の旅団》と敵対する大陸西部最凶の獵兵团である《赤い星座》。

今はランディ・オルランドと名を変えているようだが、彼はその赤い星座の団長の息子であり、《闘神の息子》の二つ名で呼ばれた

ランドルフ・オルランドに違いない。そう、あの赤き死神と恐れられた。

しかし何故《闘神の息子》がここにいいのか、皆目見当がつかなかった。そもそも猟兵团とは大陸諸国で活動する傭兵部隊の中でも特に優秀な部隊を指して使われる称号である。

規模や目的に応じた柔軟な契約が行えることから、私兵として使われていることが多く、猟兵团の運用を禁じている国もある。何か目的があつてこの場にいるのか、それとも勘ぐり過ぎだろうか。

「……コホン。初めまして。エリイ・マクダエルです。あなたと同じクロスベル市の出身です。よろしくお願ひしますね」

「あ、ああ……」

そんなルインとは裏腹に自己紹介は続く。灰色の髪の少女は大きく咳払いをすると、自らをエリイ・マクダエル、と名乗った。もしや彼女はクロスベル市の市長にして、クロスベル自治州政府代表の一人であるヘンリー・マクダエルの縁者なのだろうか。勿論、同姓だけで何の関係もない可能性もある。

「ティオ・プラトー。レマン自治州から来ました。……よろしく」

黒衣の少女はティオ、と名乗って頭を下げる。笑えばさぞ愛らしい少女なのだろうが、抑揚の無い声と、浮かべる表情からそれはほど遠い。

見たところ十代半ばほどだろうが、その年頃の少女が持つ雰囲気は一切感じられなかった。一方ロイドも次々と名乗る同僚たちにごうにか返事をしている。

「よ、よろしく……」

「ルイン・アスールと言います。彼と同じ警察学校出身です。以後お見知りおきを」

最後はルインだ。ここでこれ以上、考えても無駄である。作り笑いを浮かべ、名乗る自分は彼らにどう映っているのだろうか。

ロイドの方は少なからず驚いているようで、エリイは好意的に見てくれているようである。ティオは相変わらず感情が読めず、ランディは小さく口笛を吹いた。

「ひ、久しぶり……。えっと、セルゲイ課長……?」

「ん、なんだ?」

「『特務支援課』というのは一体どういう場所なんですか? その……自分も含めてずいぶん若い顔触れのような」

どうにか笑みを浮かべたロイドだが、途端に真剣な表情になって尋ねる。そもそも『特務特務支援課』とは何なのだ。ルインも新設される部署であるとしか知らない。

だが新設される部署にしてはメンバーが若すぎる。ロイドとルインは十八歳だし、恐らくエリイも同じくらいだろう。ティオに至ってはどう見ても十代半ばである。ランディも二十代を僅かに過ぎたところだろう。

「ま、色々あったな。ちなみに全員、お前と同じく期待のルーキーばかりだ。クク、気楽でいいだろう?」

「は、はあ……」

「……いいのかしら」

気楽でいいだろう、と笑うセルゲイにロイドはどう返事をしていか分ならず、エリイも不安そうな顔で呟いている。気楽は気楽だろうが、五人でしかも皆が新人というところが何か引つかかる。

「……余程特殊な事情のようですね」

「ま、口やかましい先輩がいないってのは有難いねえ」

セルゲイはルインの言葉に答えず、ただはぐらかすように笑っているだけ。ランディは嬉しそうだし、テイオはと言えば無言。その色々あった、は本当に色々あったのだろう。

正直嫌な予感しかないが、どの道ルインには選択肢はないのだ。

養父が死んでから、ルインはただ一つだけを目指して走ってきた。捜査官になって誰かを助ける仕事をして、全てが赦されると思わない。かつて自分が犯した罪は重い。

だが養父のようになりたかったのだ。誰かを守れるような人間に。その時、ルインの思考を遮るように甲高い音が鳴り響く。

「こちらセルゲイ……おお、ご苦労さん」

懐から何かを取り出したセルゲイは、その何かに向かって話しかけている。ルインからはよく見えないが、携帯用の情報端末だろう。遊撃士協会や警察に設置されているものを更に小型化したもので取り付ける必要はなく、持ってさえいれば連絡が取れるという優れものだ。

良い事でもあったのだろうか。通信を切った彼は悪役さながらの

笑みを浮かべたのだった。

「……ああ、了解だ。それじゃあ後始末の方は任せてくれ。よし、喜ベルキーども。この『特務支援課』がどんな仕事をするのか…
…これから素敵な場所でじっくりと体験させてやろう」

実戦テスト

クロスベル警察を出たルインたちは、黙ってセルゲイの後に続く。広場を抜け、たどり着いたのは駅前通りの外れ。

怪訝そうな顔をするルインたちには構わず、セルゲイはさっさと歩いて行った。

「ここは……」

「駅前通りの外れ……一体、何があるのかしら？」

思わず呟くのはロイドとエリィ。確かルインの記憶が正しければ、この先にあるのはクロスベル市の地下に広がるジオフロントの入口だったはず。

どうやら何となく察しがついたらしいランディは、呆れたような顔で眼下を見つめている。

「後始末とは言ってたが……まさか資材を片付けるとか言っんじゃないだろうな？」

そんな彼らに対して、ティオは黙ったまま。一言も喋ろうとはしない。喋べる気がないのか、はたまた喋べる必要もないと判断したのか。

ルインも特に何も言わず、階段を降りて行く。視線だけは前を歩くランディから逸らさぬまま。

「ここから先は、クロスベル市の地下に広がる『ジオフロント区画』になる。今から、この中に潜ってもらおう」

鉄の扉を背にしたセルゲイはとんでもないことを口にした。鈍い灰色に、黒と黄色の線が入った扉は関係者以外立ち入り禁止、ということに他ならない。

潜ってもらおう、抑揚のない声音で言つてのけるセルゲイに、ロイドとエリイが同時に声を上げた。

「ええっ!？」

「も、潜るって……」

「おいおい。どういうことッスか？」

「テスト代わり、と言う訳ですか。初めは差し詰め、面接代わりで？」

眉を潜めるランディを一瞥し、ルインはセルゲイに視線を移した。新設される特務支援課に集められたメンバー。皆がルーキーである。実績があるはずもなく、かつ役に立つかどうかも分からない。実戦と訓練は似ていても全く別物だ。

「どんなに訓練の成績が良くても、実戦で役に立たなければ何の意味もない。」

手っ取り早く、使えるか、それとも使えないか判断するには実戦が一番だ。

加えてこの五人の相性を見るためでもあるのだろう。たった五人の部署である。何より連携が大事にされるはず。

ルインが問うと、セルゲイはあっさりと認めた。

「その通り、これはお前たちの総合能力、および実戦テストのためだ。ジオフロント内部はそれほど手強くはないが魔獣の類いが徘徊

している。それらを掃討しながら一番奥まで行ってもらう」

ルーキーのテストにジオフロントはうってつけということだ。

だがやはり気になるのはセルゲイが言った後始末、とそして特務支援課の仕事、との言葉。新人ばかりが集められ、新設された部署にまともな仕事があるはずもない。

「……なるほど」

「実戦テストか。ま、それなら気が楽かね」

エリイもランディも納得したようだが、ルインは到底笑えなかった。特務支援課の仕事、が予想出来てしまったから。本来、魔獣の掃討は捜査官の仕事ではない。

やはりロイドも気付いたのだろう。慌てたように声を上げる。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ テストはともかく……どうして魔獣が徘徊する場所にわざわざ入る必要があるんですか？ 警備隊じゃあるまいし……捜査官の仕事じゃないですよね？」

それは捜査官ではなく、警備隊の仕事だ。そもそも捜査官には必ずしも“強さ”は必要ないのだ。

警察学校で習ったのも犯人の確保や制圧に関することであって、魔獣と戦うことではない。

しかしセルゲイもロイドの答えなど予想していたのだろうか。意地の悪い笑みを浮かべている。

「クク、確かに普通は捜査官の仕事じゃないだろう。だが、特務支援課に所属するメンバーは話が別だ」

「え……」

「詳しい説明は後だ。まずはコイツを受け取れ」

よつは聞くな、さっさと行け、ということらしい。セルゲイは瞬く間に会話を切り上げると、何かを取り出してルインらに手渡した。硬質な輝きを放つ金属の塊。セルゲイが使っていた携帯端末に似ている。懐中時計よりも少し大きいそれは、ルインにとって馴染みのあるものだった。

第五世代戦術オーブメント

「これは……」

「新型の戦術オーブメント？」

手渡された物を見て、ロイドとエリイが驚いたように口を開いた。一見すると金属の時計のように見えるが時計ではない。

そもそもオーブメントとは神秘のエネルギー『導力』によって動く機械の総称。

現在では照明から通信、兵器に至るまで様々なオーブメントが開発されている。その中でも戦術オーブメントは結晶回路と呼ばれるセピス 七耀石の欠片から作られたものを組み込むことで、魔法を操ることが出来た。

その七耀石にも地・水・火・風・時・空・幻と七つの属性が存在し、スロットにセットする結晶回路によって、回復や防御など様々な魔法を使用することが出来るのだ。

あくまで戦術オーブメントを用いた魔法であるため、オーブメントさえあれば誰でも魔法 オーバルアーツの使用が可能だ。

「へえ……ずいぶん洒落たデザインだな」

「第五世代戦術オーブメント、通称ENGMA……ようやく実戦配備ですか」

「確かより強力になった新魔法を発動出来る上に、通信機能も搭載しているようですね。ただ中継ターミナルの問題で、普及にはまだ至っていないようですが。実地テストと言う訳ですか」

ランディがひゅう、と口笛を吹けば、オーブメントを見たティオが目を細める。勿論、ルインも知っていた。

第五世代戦術オーブメント、通称ENGMA^{エングマ}。以前の懐中時計のようなものからデザインも変更されているが、それだけではない。より強力になった新魔法を発動出来る上に、小型の携帯端末としても使用出来る。

しかし携帯端末として使用するには、中継ターミナルの問題があった。とても高価であるために未だ大陸全土には普及していない。今回はさしずめ、実地テストということだろう。データを取るのなら警察や遊撃士協会が最適だからだ。

すらすらとENGMAの特徴を口にしたルインに、ティオはほんの少しだけ驚いているようだった。

「……随分詳しいな。ああ、財団の方から先日届いたばかりの新品だ。お前たちの適正に合わせて既に調整もされている。使い方はティオ。お前がレクチャーしてやれ」

セルゲイの言う財団とは、オーブメントを発明した天才導力学者C・エプスタイン博士の業績を受け継いだエプスタイン財団のことであり、戦術オーブメントを開発している唯一のメーカーでもある。ただ戦術オーブメントには個人の適性も関係するため、スロットの数や配置などが異なる場合が多い。

しかし既に調整も済んでいるとは随分と用意がいいものだ。

「……面倒だけど了解です。新型用の結晶回路^{クォーツ}はありますか？」

「ああ、少ないが受け取れ。それと肝心のこいつだ」

手渡されたのは、宝石のように色とりどりの結晶回路と金属の鍵だった。ジオフロントの鍵だろう。

オーブメントは個人の適正に合わせて調整されているが、開封されているスロットは一つだけ。つまり結晶回路を一つしかセット出来ないのだ。

より多くの結晶回路クォーツをセットすることによって強力な魔法アーツを使用出来るため、今の状態ではごく簡単な魔法を使用出来る程度だろう。

「それじゃあ、一通り魔獣を掃討したら本部に戻って来い。細かい話はその後にしてやろう。おっと　ついでにこいつも渡しておくぞ」

セルゲイは懐から取り出したものを投げて寄越すと、ルインたちを置いて歩き出す。

慌ててロイドが受け止めたそれは一冊の手帳だった。クロスベル警察のエンブレムが描かれていることから捜査手帳だろう。

「ちょよ、ちょつと課長!？」

「　ああ、それとロイド。とりあえずお前、リーダーな」

セルゲイを呼び止めようとしたロイドだが、彼の口から出た思わぬ言葉に文字通り固まった。へっ、と間の抜けた声を漏らして目の前の『課長』を見つめている。

ちなみにルインはわざとらしく視線を逸らしていた。

「今の所、捜査官としての正式な資格を持っているのはお前とルインだけなんだよ。ルインが嫌だって言う訳でお前、リーダーな。それじゃあ任せたぞ」

この中で正式な捜査官の資格を持つのはロイドとルインだけ。そもそも今回、捜査官の試験を受けて受かったのはロイドとルインの二人である。エリィとティオはどう見ても捜査官には見えないし、ランディも恐らく違う。《闘神の息子》が捜査官の資格を持っているとは考えづらいからだ。

そうなればリーダーを任されるのはどちらかになるだろう。ルインはともリーダーなんて柄ではないし、ロイドの方が適任だ。そんな訳で、ここに来る間にセルゲイに耳打ちしておいたのである。

リーダーなら彼の方が適任だと思います、と。

不釣り合いな少女

突然リーダーを任されたロイドは呆然としていた。少し罪悪感を感じたが、彼の方が適任だろう。

全体を見る目はまだしも、他の者を気遣うと言う点ならば、ロイドの方が秀でている。リーダーなどルインの柄ではないし、彼より他に相応しい者はいない。

「ハツハツハ。押し付けられちまったなあ？」

「ふふ、でも捜査官の資格を持っている人が二人もいて心強いです。ロイドさん、よろしくお願いしますね」

ランディが歯を見せて笑うと、エリイは思わず笑みを漏らす。少しだけ困った顔をしているが、ロイドもルインを責める気はないらしい。

「ルインはそうやってすぐに俺を押すから……。あ……。いや、呼び捨てでいいよ。見たところ歳も近いみたいだし」

「そう？　ちなみに私は十八だけど……」

呼び捨てでいい、と言われたエリイはロイドとルインの顔を見比べた。落ち着いた雰囲気や言動から、年齢よりも上に見られることが多いルインである。

やはりエリイもロイドやルインと同じ年だったらしい。彼女の笑顔も幾分か柔らかなものになった。同年代だと分かったからか。

「私も貴女と同じ年だから」

「ああ、それなら同じ歳だ。えっと、あなたたちは……？」

ロイドの視線がランディに移り、そしてティオで止まった。少女の正確な年齢をはかりかねているのだろう。

いくら特務支援課が新設されたばかりだとしても、十代半ばほどの少女をメンバーに入れるだろうか。

だが、驚異的な童顔でもない限り、ティオの年齢と外見年齢は合致しているはず。

「俺は二十一だが、堅苦しいからタメ口でいいぜ。よろしくな、ロイド、ルイン、エリイ」

「ええ、こちらこそ」

「……よろしく」

タメ口でいい、と笑うランディは普通に見れば、気の良い兄ちゃんだ。

にこやかに笑うエリイに倣い、ルインも淡い笑みを浮かべた。ランディの真意が分からない以上、ここでおかしい態度は絶対に取れない。

不信感を抱かれるなんて面倒だし、真つ平御免である。

セルゲイがどこまで知っていて、彼を特務支援課に引き入れたのか分からないが、用心するに越したことはない。今はなんであれ、彼は“闘神の息子”なのだから。

「ああ、よろしく頼むよ。……えっと……それで、君の方は……？」

「十四ですが、問題が？」

ロイドが聞きづらそうに尋ねると、案の定、ルインにしてみれば予想通りの答えが返って来る。

普通に考えればテイオが自分たちより年上であるはずがない。…あの道化師ならば別だが。

テイオは何か文句でもあるのか、と言わんばかりの表情だ。ロイドの笑みがひきつる。

「い、いや〜。別に問題があるわけじゃ…って、十四歳っ!？」

あははは、と笑っていたロイドが突然、大声を上げる。

何度も瞬きし、信じられないものでも見るような瞳だ。まさか十四歳と返って来るとは思わなかったのだろうか。

一方、ランディは驚くどころか豪快に笑っていた。

「ハハ、なんだ。見た通りの歳ってわけか」

「驚いた…そんな若くて警察に入れるものなのね」

「いやいや! どう考えてもおかしいから! たしか一般の警察官でも十六歳以上だったはずだし…。日曜学校も卒業していない子がどうして警察なんか」

エリイは大体、ロイドと同じ反応らしい。

ロイドが言うように、警察官や捜査官には当然のことながら年齢制限がある。一般の警察官でさえ、十六歳以上だという決まりがあった。

どんなに優秀な人物であっても、十四歳では警察官にはなれない。

「テイオ、貴女は財団から派遣されたのね」

「……はい。正確に言うとなわたしは警察官ではないです。エプスタイン財団から出向したテスト要員ですの」

ルインの言葉を否定することなく、テイオは頷いた。エプスタイン財団では年齢に関係なく、優秀な者を起用するという。

それにセルゲイは言っていたではないか。戦術オーブメントを渡した後、テイオ、お前がレクチャーしてやれ、と。わざわざテイオを指名したのは、彼女がオーブメントについて知識を持つ者だから。

ロイドやルインは警察学校で一通り、戦術オーブメントについて学んだが、それはあくまで旧式のもので、第五世代戦術オーブメント エニグマについては学んでいない。

現在クロスベル市で進められている“計画”を含めると、彼女が財団の人間であるだろうと想像することが出来た。

出向の理由

明らかに十代半ばと思われる彼女が、捜査官とはとても思えない。ルインが予想出来たとしても、ロイドたちは別だ。ロイドはへつ、と戸惑っているようだし、ランディは不思議そうな表情を浮かべていた。

「エプスタインっていやあ、さっきの戦術オーブメントの……」

「そう……なるほどね。ここ数年、クロスベル市が財団と協力して大規模な計画を進めているのは聞いていたけど……」

頷くエリイも合点がいったらしい。まだここ数年の話だが、クロスベル市と財団が協力して大規模な計画を進めている。

『導力ネットワーク計画』と言い、端末同士を導力ケーブルで結び、莫大な情報のやり取りと処理を可能にするものだ。

本来はリベール王国のツァイス中央工房との共同であったが、クロスベル国際銀行から資金提供を受け、クロスベル市への本格的な試験導入が始まっていた。

「『導力ネットワーク計画』ですね。そちらにも少しは関わっていますがわたしの出向目的は別にあります」

「でしょうね。いくら計画に携わっていても、警察に出向するはずがないし」

ルインも彼女が導力ネットワークのために特務支援課に来たとは思わない。

警察はネットワーク計画に関係はないし、それならばICB(ク

ロスベル国際銀行)に出向しているはずだ。

次にテイオが取り出したもの。それは金属製の杖だった。

「それは……」

「機械仕掛けの……杖？」

ロイドもエリイもまじまじとテイオが持つ杖を見つめている。恐らくはその杖が財団から派遣された理由なのだろう。

金属の杖に見えるが、ただの杖ではない。彼女がわざわざルインたちに見せたということは、特殊なものだ。

オーバルスタッフ

「魔導杖といえます。この新武装の実戦テストのため、わたしは財団から出向しました。……ロイドさん。ご理解いただけましたか？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！もしかして……その杖を使って君も戦うのか？」

「ご理解いただけましたか、とすました顔のテイオに対し、ロイドはひたすら狼狽していた。

杖とテイオを何度も見比ている。彼の気持ちも分からないではないが、歳と見た目で判断するのはテイオに失礼だろう。

「……捜査官の資格があるのに、ルインさんと違ってずいぶん察しが悪いですね。『実戦』テストのために出向したと言いましたが……？」

「うっ……」

嫌味を言われ、目を伏せるロイドを見て、思わず笑みが漏れる。

警察学校時代から優秀だったロイドだが、抜けていることがあった。もつとも、それも彼の良さなのだろうが。

「まあまあ。ここでモメても仕方ないぜ。この先のジオフロントつてのがどれだけ危険かは知らない……まずは、あのオッサンが押し付けてきた任務ミッションをクリアする事を考えようや」

そんなテイオを宥めたのはランディである。彼のいうことはもつともだった。

何にせよ、セルゲイが言う任務をクリアしなければ始まらない。ここで言い争っている暇はないのだ。

「そうね……納得できない事も多いけど」

「行動で示せ、そういうことでしょうか？　なら、さっさと終わらればいい」

ふう、と息をついたエリイに、ルインは不敵に微笑む。

セルゲイの考えはまだよく分からないが、テストならば早く終わらせるべきだ。

ロイドもランディやルインが言いたいことが分かっていたらしい。テイオを見て、申し訳なさそうに謝った。素直に自分の非を認められるのは、ロイドの美点の一つだろう。

「……分かった。すまない、テイオ。気分を悪くしたら謝るよ」

「別に……あなたの反応は常識的だとは思いますが。ところで、わたしの武装はこの『魔導杖』ですが……皆さんの武装は何ですか？」

ジオフロントに入る前に、互いの武装を確認した方がいいだろう。テイオはテストのために魔導杖を使うのは分かる。

ロイドは警察学校で一緒だったため、知っているが、後の二人も見れば分かった。

エリイは腰のホルスターから、ランデイも大きすぎるため一目瞭然である。

「ああ、それじゃあ 俺の獲物は、これだよ」

ロイドが構えて見せたのは、折り畳み式の武器である。

棒の端近くに握るための短い棒が取り付けられたもので、基本は二つ一組で使う。

警察官ならば馴染みと言ってもいい武器だ。ただ、一般人には馴染みのないものだろう。現にエリイは一瞬迷ったような顔をした。

「それは、警棒の一種……？」

「トンファーか。東方で使われる武具だな。殺傷力よりも防御と制圧力に優れているらしいが……」

「そうは言っても攻防一体の武器だから、対象の無力化に便利だし、使いこなせば強力よ」

一般人には馴染みのない武器だが、養父がカルバード共和国の間であるルインにすれば、珍しいものではない。そうでなくとも、武器については一通り、頭の中に入っている。

警察学校でもロイドと同じように、トンファーを選ぶ者は少なくなかった。

トンファーは突き出して攻撃するのは勿論、相手の攻撃を受け流

すことも出来る。他にも長い部分を棍棒のように扱うことも出来るため、使いこなせたならば、対象を簡単に無力化することが可能だろう。

波紋を描くもの

「なるほど。警察官らしい装備ね」

「色々試してみたんだけどこれが一番しっくり来てね。ルインは知ってるとして、エリイとランディの獲物は？」

トンファーを見たエリイが納得したように頷く。防御と制圧力に優れた武器は確かに警察官らしいだろう。ロイドらしいとも言える。その点ではルインの武器は警察官向きではない。どちらかと言えば遊撃士たちが使う武器だ。実際、警察学校でもルインと同じ武器を選んだものは一人もいなかった。

警察学校時代からの付き合いであるロイドは、ルインの武器についても知っている。彼はトンファーを仕舞うと、エリイとランディに視線を向けた。

「私は……これね」

「導力銃……少し古いタイプですね」

「ずいぶん綺麗な銃だな……」

テイオとロイドが感嘆の声を上げる。エリイが腰のホルスターから取り出したのは、美しいフォルムを描く銀の銃。グリップは薄紅色をしており、いい意味でも悪い意味でも、とても戦闘に使うような銃には見えない。

よく見れば精緻な細工が施されているし、どちらかと言うと飾られているような銃だろう。古風な、とも言えるかもしれない。

そんな彼の心を読んだようにエリイが笑う。

「競技用に特別にカスタムしてもらったのよ。旧式だけど、狙いの正確さは期待してくれてもいいと思う」

「ええ、アテにさせてもらうから」

「おつ、自信満々だねえ。そんじゃあ、俺はコイツだ」

特別にカスタムして貰ったらしいが、確かに期待してくれてもいい、と言うだけあつてかなり使い込まれている。旧式だということも差し引いても、彼女の実力が分かるというのも。大体、その人物の実力は愛用の武器を見れば分かるのだ。特に導力銃はメンテナンスが大事である。旧式ならば尚更。アテにさせてもらうから、とルインが笑つと、エリイも任せて、と力強く頷いた。

そんな二人を見ていたランデイがルインたちに見せた武器。それは、

「それは……ずいぶん大きな武器だな」

「中世の騎士が使っていたハルバードみたいな形ね……」

ロイドは驚き、エリイもランデイの武器に見入っていた。ランデイの武器は正に、黒銀のハルバードそのもの。槍の穂先に斧がつき、反対側には小さな鉤状の突起がついている。ハルバードの語源は棒を表すハルムと斧を表すベルテからなるとされ、斬る、突く、叩くなど様々な使い方が出来るという。最強のポールウエポンと言っても過言ではない。

何通りもの使い方が出来るハルバードだが、その重さは勿論、使いこなすには相当な技量が必要とされることから、使い手は限られる。それを武器としていることから、彼の実力のほどが知れるだ

ろう。ただ、ルインの記憶が正しければ《闘神の息子》の武器はスタンハルバードではないはずだ。

「……財団の武器工房で見かけたことがあります。導力を衝撃力に変換するユニットがついていますね」

「ああ、スタンハルバードだ。ちよいと重くて扱いにくいが一撃の威力は中々のもんだぜ。で、ルインの武器は何なんだ？」

「……わたし？ わたしはこれ」

テイオの言葉に頷いたランディは、俯くルインに視線を向けた。ルインは彼の声でふと我に返り、下緒を外してロイド以外にも『それ』を見えるようにする。

黒塗りの鞘に納まったものを見て、ロイドを除いた三人はほお、と感嘆の溜息をついた。反り返った刀身が印象的な剣は刀、と呼ばれるものだ。鯉口を切って、僅かに峰を見せる。晒された刀身は美しい銀の波紋を描いていた。剣とはまた違った美しさがある。

銀の刀身を見つめていたランディが視線をルインに移した。刀の使い手の殆どはカルバードの者だが、彼女はどう見てもそうは見えない。

透き通るような青い髪と董色の瞳。カルバードの出身の者は黒や茶など濃い色の髪を持つ者が多いからだ。

「刀、か。折れず、よく切れる。で有名だが、使い手も少ない、だったか。だがカルバードの人間じゃないよな？」

「確かにそうは見えないけど……」

「養父がカルバード出身だったから。これは養父の形見」

エリイも緑の瞳を瞬かせてルインを見つめていた。

刀は強度と靱性を兼ね備えており、切れ味ならば普通の剣を凌ぐとされている。カルバードの剣士が扱う刀だが、使いこなすにはカルバード同様、技量が必要だ。

ルインは不思議そうな顔をする三人にその理由を語った。カルバードの出身だったのは養父の方で、この刀は養父の形見だということ。そして扱い方や手入れは養父から教わった、と。

養父はそれなりに名の知れた遊撃士^{ブレイサー}だったが、そこまで詳しく言う必要はないだろう。刀身を鞘に納め、腰に戻す。これで一通り、情報交換も終わった。

ルインにしてみれば、さっさと与えられた実戦テストとやらを終わらせたいものだ。

「なるほど……。ティオの杖が、どういうものかは判らないけれど……魔獣との戦闘になったらバランスよく戦えそうだな」

「確かに……」

「ま、そのあたりも考えて俺たちを集めたのかもしれないな。あのオッサン、とぼけた顔して結構したたかそうだったし」

「曲がりなりにも『特務支援課課長』だから、じゃないの」

ロイドの言うように、このメンバーはバランスが取れていると言えよう。エリイも納得したように声を上げている。ロイドとランディ、ルインが前に出て、エリイとティオは後方からのサポートといった感じだろうか。ティオの魔導杖について詳しいことは分からない

いが、彼女が使い手ということから、少なくとも至近距離から攻撃するためだけの武器ではないはずだ。

セルゲイの考えは読めないことが多いが、その辺りはちゃんと考えたのか。ランディは結構したたかそうだった、と言うがルインも大体同じ考えだった。変わっているのは一見して分かったが、結構な食わせ者に違いない。

「……そうですね。わたしの魔導杖の性能はおいおい説明します」

「それじゃあ……とにかく中に入れてみよう。まずは安全に気を付けて進んだ方がよさそうだ」

何はともあれ、ここで話してばかりはいられない。ジオフロントに入ってみなければ始まらないのだ。準備は既に出てきているし、支給された戦術オーブメントも使い方は従来のものと殆ど変わらない。大きく変わったのはデザインと追加機能くらいだろう。

開封されたスロットには既に結晶回路クォーツがセットされているため、調整は必要ない。

「ええ、そうね」

「……了解です」

「んじゃ、行くとしますか」

「課長のご期待に沿えるように、ね」

この先にいるのは大した魔獣ではないだろうが、仮にもこれは実戦テストなのである。ルインは思ってもないことを口にする、冗談めかして笑う。

晴れてリーダーとなったロイドの言葉に皆が頷き、ジオフロントに繋がる扉を潜った。

波紋を描くもの(後書き)

眠いです、非常に眠いです……！

ジオフロントA区画

ジオフロントA区画。鍵を開けた先に広がるのは鈍色の世界。金属の冷たさはあれど、温かみは一切なかった。頭上に設置されたオーブメントから十分な光が降り注いでいるが、この中にいると時間の感覚が掴めなくなりそうだ。

金属の床には赤いカラーコーンやドラム缶が無造作に置かれている。

最初は一本道であるため、迷うことはない。警戒を忘れずに階段を降り、先に進む。しばらく歩いてきた一行だが、開けた場所に辿りつくと、立ち止まって辺りを見回す。人の出入りが少ないためか少々埃臭い。

「ここが『ジオフロント』……」

「話には聞いていたけどこんな場所が都市の地下に広がっていたなんて……」

「は、たまげたな。中世の下水道あたりが残っている場所かと思っただが」

ロイドを始めとして、エリィとランディも驚きを隠し切れないようだ。例外なのはルインとティオで、三人が周囲を見回す中、そんな彼らを見つめていた。

いくらクロスベルに住んでいても、ジオフロントに入ることはまずないだろうし、住民の殆どは地下にこんなものが広がっていると知らないはず。中世の地下水道の話ではない。金属に覆われ、オーブメントも設置されていることから、かなり新しいだろう。

三人の疑問に答えたのはティオだった。

「データベースの記録によると二十年前の都市計画と同時に建造が開始された場所らしいです。上水道、下水道、ゴミ処理施設に加え、導力ケーブルや各種プラントなども後から設置されたようですね」

「ここ最近は何の出入りもないようだけど」

彼女がデータベースで調べた記録によると、二十年前に立ち上がった都市計画と同時にジオフロントの建造が開始されたらしい。ただの地下道ではなく、上下水道やゴミ処理施設を始めとして、様々なものが設置されているようだ。

ルインは金属の床を見つめた後、皆の方を振り返った。入り口からここまで歩いて来た感じだが、ここ最近は何の出入りもなさそうである。魔獣の糞などは落ちていたものの、掃除された形跡はない。カラーコーンやドラム缶が放置されていたことも考えると、魔獣にはほとんど手を焼いているのだろう。

「……いや、これは確かに予想外の場所だったかもしれない。しかし、この上はたしか中央広場あたりになるんだよね？ その地下に魔獣が徘徊しているのか……」

ロイドは天井を仰ぐ。勿論、そこにあるのは変わり映えのしない金属の天井だが。

恐らくこの辺りはちょうど中央広場。街の真下に魔獣が徘徊しているとはあまり穏やかではない。しかも人々はその事実すら知らないのだ。

「普段は封鎖されているため都市に現れることはありませんが……たまたま工事現場の作業員の方々が襲われてケガをする事があるようです。ですが現在、警察の方では対処しきれないようですね」

「……そうか……」

「緊急性も重要性もないからでしょう」

厚い金属の扉に阻まれ、鍵まで取り付けていることから、魔獣が市街に現れることはない。魔獣にとっても地下は湿気も多く、生活環境としても良いようで、ジオフロントから出ようとしないようである。

ただ、いくら人の出入りが少ないとは言え、ジオフロントは未だ建造中だ。修繕などでも作業員が出入りすることもあるし、彼らも気を付けてもそこは魔獣。逃げる、あるいは倒すにも限界はある。そうか、と呟くロイドにルインは少し呆れたように言葉を吐き出した。警察で対処しきれていない現状。明らかに『捜査官』の仕事ではない。

地下道の魔獣退治など進んでする者はまずいないだろうし、魔獣というのは駆除が難しい。その生命力は凄まじく、倒しても倒してもどどん湧いてくるのだ。まるで雑草や虫のように。

魔獣を一掃するにも手間と人手が必要である。

しかし駆除をするほど緊急性もないし、重要度も低い。何かが起こった時に対処しているだけに留まっているのではないか。そんなことだからクロスベル警察は、と言われてもこの場合は仕方ないだろう。

「そのための特務支援課……ということかしら？」

「ま、それならそれで、判りやすくしていいけどな」

まだセルゲイの意図が理解出来た訳ではないが、普通の部署では

対処出来ない問題を解決する。エリイが言うように、それが特務支援課なのだろうか。

ランディは軽く笑って皆の方を見る。ただの実戦テスト、と言われるよりは確かに判りやすい。ただ、他の部署の後始末を押しつけられるような嫌な予感もしたが。

「状況は判った。捜査官の役目かどうかはともかく、必要な仕事であるのは確かみたいだ。テストであるかどうかは別にできちんとやり遂げておこう」

「おーおー、真面目だねえ」

「それが彼のいい所でもあるから」

どこまでも真面目なロイドを見て、茶化すように笑うランディ。いかにもロイドらしいと思う。例えこれがテストではなくても、彼は手を抜かず、最後までやり遂げるだろう。警察学校時代と変わらない同級生に、思わずルインの頬も緩む。

真面目なのはロイドの良いところだった。真面目といっても堅苦しくもなく、冗談も通じる。優等生ではあるが、話の分かる彼なのだ。

「でも、確かにそうね。一つ一つ基本を確かめながら確実に進んでいきましよう」

「……了解です」

頷き、微笑むエリイにティオも小さく首肯した。これまで魔獣の姿はなかったが、この先はそうも行かないだろう。焦らず、確実に進んだ方がいい。通路にしては広いとは言え、やはり狭いことには

変わりはないし、魔獣と戦う時も位置取りが重要になって来る。

ロイドとルイン以外は初めて顔を合わせたのだから、息のあった動きはまだ無理。下手をすれば足を引っ張るかもしれない。一人で戦うことと皆で戦うことは違う。

ルインとて候補時代は単独任務ばかりだったし、警察学校で集団戦の実習はあったが、やはり勝手が違うのだ。

初戦闘、そして

どうやらドアは自動らしい。金属製の扉の先には、細い通路が広がっている。鈍色の壁には赤いコードが何本も走っており、両端には柵が取り付けられていた。

そして早速、魔獣のお出ましである。ただ、ルインたちに気付いていないらしく、背を向けたまま。

深い青の体毛に頭部から無数に生えているのは、黄色の突起。一見すると大きな鼠のようだが、れっきとした魔獣だ。

数は三体。決して遅れを取る魔物ではない。普通に戦っても勝てるだろう。本来の力を出しきれないルインでも。

ルインたちは無言で頷き合い、同時に金属の床を蹴った。ルインは刀に手を添えたまま、一瞬で間合いを詰める。

この程度の魔獣、魔法を使つまでもない。

ルインの隣に並んだのはランディ。その後ろに、ロイドも続く。

《闘神の息子》と共に戦うなど、直ぐに割り切れるものではないが、やるしかない。

エリイの銃から放たれたエネルギーが魔獣の動きを止めると、レイオが振るつた魔導杖から生まれた無数の紫光が薙ぎ払う。

魔法のように見えたが、光の出所は杖だろうし、アーツを発動するには駆動時間が必要だ。

否、今はそんなことはどうでもいい。息を吐き出し、刀を抜き放つと同時に魔獣を両断した。飛び散った血が床を赤く染める。

それから僅かに遅れて、ランディが振り下ろした戦斧が魔獣を穿つ。ロイドは自身の手足のようにトンファーを操り、無駄のない流麗な動きで突きを放つ。弾き飛ばされた魔獣は壁に叩きつけられ、断末魔の悲鳴を上げた。

ルインは刀に付いた血を払い、鞘に納める。

「よし……何とか倒せたか」

ロイドもトンファアを下げ、小さく息を吐く。何せ、特務支援課、初の実戦である。五人で戦うのなら、チームワークが肝心だ。今は大した魔獣ではなかったが、下手をすれば足を引っ張るかもしれない。

いくら個人の能力が優秀でも、戦い方次第では個々の力を活かすきれない。

「ま、そこまで手強い相手じゃなかったみたいだな」

「この程度で手こずるようなら、話にならない。そう言うことでしよう?」

ルインは笑うランディに冷ややかに言い放つ。

どこか刺があるような言い方に、ルイン自身も内心舌打ちする。

彼の方は気にしていないようだが、問題を起こして気づかれでもしたら厄介だ。

知らぬ存ぜぬで通せるほど、《闘神の息子》も甘くはないだろう。

「でも、これでお互いのスタイルも何となく掴めたわね。ティオちゃんの魔導杖の性能にはちょっと驚かされたけど……」

エリイが話題を変えてくれたことで、ほっと胸を撫で下ろす。途端、一斉に皆の視線がティオに向けた。

エリイとティオの二人にはサポートに回って貰うのが賢明だろう。エリイの銃は牽制に持ってこいだろうし、射撃の腕も文句ない。

ティオの魔導杖はやはりただの杖ではなかった。杖から放たれた

のは眩い紫の光。魔法の光とよく似ている。

いや、そのものと言っていていいだろう。

「……確かに。あの杖から放たれたのはやっぱり魔法のたぐいなのか？」

「ええ、そうなりますね。通常のアーツと違って外す可能性はありますが……駆動時間なしに近距離のアーツを発動しているのと同じ効果です」

ロイドの言葉に頷いたティオは魔導杖について説明してくれる。通常のアーツはまず外れることはない。魔導杖も狙いは付けられるらしいが、オーブメントほど正確ではないとか。その辺りはまだ調整段階であり、そのためのテストだろう。

しかし駆動時間なしにアーツを行使出来るのは強みである。アーツは確かに強力だが、その間は集中しなければならぬため、どうしても無防備になってしまう。

まだテスト段階だとしても、戦闘でも随分なアドバンテージになるに違い。ランディはと言えば、興味深そうにティオの説明を聞いている。

「ふむ、そうなると色々と戦術に幅が出そうだな」

「アーツを駆動時間なしに操れるのは強みね。ただ駆動時間がないから、威力の方は“それなり”みたい」

見たところ、魔導杖には改良点も多いのだろう。ルインも少し見ただけで、あまり偉そうなことも言えないのだが。アーツを駆動時間なしで行使出来るという点では強力だが、やはりやや威力不足は否めない。

オーブメントから強力な力を引き出すには、当たり前だが時間が掛かる。その時間が駆動時間なのだ。アーツの威力は駆動時間に比例する。駆動時間が長ければ長いほど、強力なアーツだと考えて良いだろう。

「それは仕方ありません。まだテスト段階の新装備ですから。それと、わたしが付けているこの胸甲ですが 魔導杖と連動して一種の防御フィールドを展開する働きを持っています。見た目より打たれ強いので、前に出ても問題はないかと……」

ティオの視線は自身の胸元、正確には銀色の胸甲に向いている。彼女には少々不似合いだと思っていたが、特殊な効果があるなら納得だ。

魔導杖と連動して防御フィールドを展開出来るのなら、華奢な少女でも前に出ることは可能だろう。

太陽のような少年

「なるほど……まさに最先端の装備ね」

「ま、せいぜい頼りにさせてもらおうとしようかね」

エリイが感心したようにテイオを見つめる。ランディも頼りにさせてもらおうとしようかね、と笑ってテイオの肩を叩いた。

駆動時間なしにアーツを操れる魔導杖や、杖と連動して防御フィールドを展開出来る胸甲といい、最先端の装備である。流石はエプスタイン財団ということか。

しかし、ここに納得していない人物が一人。ほかでもないロイドだ。結構な付き合いであるルインには、彼が何を考えているのか大體分かる。

ロイドはルインの考えなど露知らず、何とも言えない複雑な表情を浮かべていた。

「うーん、でもなあ……女の子を矢面に立たせるのはちょっと……」

彼としてはいくら防御フィールドに守られているとは言え、自分より年下の少女を前線に立たせたくないと考えているに決まっている。

テイオは華奢で、とても前線で戦えるようには見えない。実際、荒事に向いているとは言えないだろう。

そんなロイドの態度が気に入らなかつたのか、テイオは不機嫌な顔になり、彼を睨みつける。

「……いえ、何でもありません」

テイオの鋭い視線に咄嗟に目を逸らすロイド。何も言えなくなつた彼を見て、ルインとエリイは顔を見合わせて笑つたのだつた。

先ほどの魔獣と言ひ、ジオフロントに生息している魔獣はそれほど手強いものではないようだ。一般人からすれば十分な脅威だろうが、遊撃士フレイサーから見てもこの程度の魔獣など、肩慣らしにもならない。ジオフロントの構造自体複雑ではないので、迷うことはなかつた。道なりに進んでいく。

途中、何度か魔獣と出くわしたが、ルインたちの敵ではない。

先頭をロイドとルインが歩き、その後ろにエリイとテイオ、殿をランデイが務める。万が一、不意打ちされても問題ないようにだ。

ルインはふと、隣を歩くロイドを一瞥した。詳しくは知らないが、彼の亡くなつた兄も捜査官だつたという。ルインにはロイドは眩しかった。太陽のようだと言えはいいのだろうか。時々羨ましくなる。

ルインは単独で戦うことには慣れているが、集団で戦うのは苦手だ。それは候補時代のことに関係しているのだが、皆の動きに合わせる事が出来ない。警察学校に在学していた時も皆、足手まといにしかならなかつた。無理に動きを合わせようとすれば調子が狂つてしまう。

そんなルインを助けてくれたのがロイドだつた。親友、と呼べるほど親しくはないが、それでも必要以上に付き合いをしなかつた自分にとつては友人と呼べる少年。

「ルイン、どうかした？」

「気にしないで。ただ、まさかロイドと同じ課に配属されるとは思わなかつたから」

見ていたことに気づかれたのだろう。不思議そうにこちらを見返

してくる。

ルインは気にしないで、と首を振ると、困ったように笑う。まさかクロスベル警察、それも同じ課に配属されるとは思わなかった。何せ、ロイドもルインも捜査官の資格を取ったばかりの『新人』だ。

「お二人は警察学校時代の友人だったんですか？」

「まあ、そんな所かな。実技の方はいつもルインには敵わなかったけど」

「ハハ、心強くていいんじゃないか？」

尋ねるテイオに、ロイドは苦笑している。ランディは茶化すように笑っているし、エリイはと言えば純粹に感嘆の視線を向けて来た。顔には出さないが、『闘神の息子』に言われるのは釈然としない。

ロイドが言ったことは事実だ。しかし、

「それは個人戦の話。それに捜査官なんだから、個人より集団の方が大事でしょう？ 判断能力だってロイドの方が優れているもの」

ロイドが言うように、彼は一度もルインに勝てたことがない。個人戦では。

それはそうだろう。結社で執行者候補として訓練を受け、『仕事』もこなしてきた。今は全力で戦えないとは言え、彼は普通の人間だ。『普通』の人間ではない自分と違って。

捜査官に求められるのは個人の強さではない。犯人を制圧する時だって、重要になるのは仲間同士の連携である。一人だけ特出していると、逆に調和を乱してしまう。

それだけではなく、リーダーとしての判断力もロイドの方が優れ

ているだろう。

「……ルインは俺を褒め過ぎだよ」

「わたしは事実を言ったままでだけど」

「ふふ、それだけロイドが優秀ということじゃないかしら？」

二人のやり取りを見ていたエリイが堪えきれずに笑みを漏らした。褒め過ぎだとロイドは言うが、ルインはそうは思わない。彼は自分を過小評価しすぎているだ。どうしても捜査官であった兄と比べてしまうからだろうか。

それに、ロイドには人を惹きつける才がある。ルインが初めて彼を見た時、太陽だと思ったように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2511x/>

蒼の残影

2011年12月11日23時47分発行